4 月 17 日のメッセージ

聖書：ヨハネによる福音書　20：　1 – 18

「わたしは主を見ました」

「兄弟たち、わたしがあなたがたに告げ知らせた福音を、ここでもう一度知らせます。」(コリントの信徒への手紙一 15:1)。パウロは、自分が大切にしていること、すなわちキリスト者として最も大切なことを忘れてほしくない、とコリントの信徒たちに伝えています。もちろんその中で、「自分も神のために働いた」ことを言うことは忘れないのです。それが神の恵みであることを強調しつつではありますが……(コリントの信徒への手紙一 15:10)。

パウロがキリスト者として知ってほしい「最も大切なこと」は、「キリストが、聖書に書いてあるとおりわたしたちの罪のために死んだこと、葬られたこと、また、聖書に書いてあるとおり三日目に復活したこと」(コリントの信徒への手紙一 15:3-4)です。2000 年経ってもこの大切さは変わりません。

しかし、ここでパウロは「ケファに現れ、その後十二人に現れた」(コリントの信徒への手紙一 15:5)と言っています。ところが、4 つの福音書を見ても、最初に復活のイエスと出会うのは、マグダラのマリアを初めとする女性たちです。パウロはペトロに気を遣ったのか。真偽のほどはわかりません。

ただ、ヨハネによる福音書は「イエスは必ず死者の中から復活されることになっているという聖書の言葉を、二人はまだ理解していなかった」(ヨハネによる福音書 20:9)と伝えています。何度も奇跡の場面に立ち会いながらもなお、自分が先に立つ救いから逃れられないペトロの姿が垣間見えるようです。事実を事実として受け止めるより、自分の理想や思いが先に立っているように思えます。何度も、何度もイエスに教えられながらここまで来たのですが、最後までその姿勢が変わることはなかったのかもしれません。だから、諦めて家に帰ってしまったのでしょう(ヨハネによる福音書 20:10)。

他方、マグダラのマリアは出来事を出来事として精一杯受け止めようとしています。イエスの亡骸が消えた墓の外で待つだけでなく、もう一度しっかりと墓を注視します。諦めずに現実をしっかり見つめようとします。

そこにイエスが現れてくださるのです(「こう言いながら後ろを振り向くと、イエスの立っておられるのが見えた。」ヨハネによる福音書 20:14)。もちろんマリアもすぐには気づきません。しかし、真剣に事実と向き合おうとする姿勢をイエスは見過ごされないのです。「マリア」と呼びかけ、気づかせてくださるのです(「イエスが、『マリア』と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で、『ラボニ』と言った。『先生』という意味である。」ヨハネによる福音書 20:16)。

イエスを目の前にして、マリアは地が震えるほどの驚きと喜びを味わいます(「地よ、身もだえせよ、主なる方の御前に／ヤコブの神の御前に」詩編 114:7)。そしてマリアはその喜びを胸に弟子たちのところへ帰っていくのです。

「わたしは主を見ました」(ヨハネによる福音書 20:18)とのマリアの言葉は、単に事実を目撃したということ以上に、神の栄光が現された事実を伝えようとするものです。これまでも伝えられていたものですが、新たに受け取り直したものとしての栄光を、新たな恵みとしての栄光をマリアは高らかに歌うのです(「新しい歌を主に向かって歌え。地の果てから主の栄誉を歌え。海に漕ぎ出す者、海に満ちるもの／島々とそこに住む者よ。」イザヤ書 42:10)。

私たちも改めてこの喜びを受け止めたい。素直に、そして新たに与えられたものとして受け取り直したいのです。そして、今一度、神の栄光を、神の恵みを「見た」者として伝えていきたいのです(「主に栄光を帰し／主の栄誉を島々に告げ知らせよ。」イザヤ書 42:12)。